

# 音楽教育におけるオンライン授業の可能性と課題

—— 保育者養成の学生と教員を対象としたアンケート調査から ——

Possibilities and Challenges of Online Classes in Music Education.

—— Based on Questionnaire for Students and Teachers in ECEC Teacher Training ——

山内信子\*

## Abstract

In this paper, a questionnaire survey was conducted on students and teachers of online classes for a Practical Music Subjects in ECEC Teacher Training Course, and the possibilities and challenges of the online class were discussed.

The spread of COVID-19 has forced universities to change their teaching methods from face-to-face to online in the 2020 year. Particularly in Practical Music Subjects, there is a continuing search for ways to improve the quality of online classes, and trial and error is being repeated. Therefore, in this study, I conducted a WEB questionnaire survey of students and teachers who actually took online classes, and clarified their perceptions and issues regarding the educational effects of online classes and class management in Music Education.

In the future, as online classes may be widely accepted as an educational format alongside face-to-face classes, it will be necessary for teachers to share their perceptions and consider the unique issues that arise in Music Education.

キーワード：オンライン授業、音楽教育、保育者養成、音楽実技

## 1. はじめに

COVID-19の感染拡大に伴い、2020年度は各地の大学等で遠隔システムが導入され、対面\*から遠隔へと授業形態の変革が迫られる運びとなった。文部科学省の調査<sup>1)</sup>によると、同年7月時点で遠隔と対面の併用が全体の6割、遠隔のみが2割強と、約8割強の大学で遠隔授業が実施された。この傾向は、同年の後期等授業期間においても継続され、同省の9月時点調査<sup>2)</sup>によると、地域でその割合は異なるものの、約6割～8割の大学が遠隔と対面を併用する予定であることが報告された。また各大学において実践された取組が、同省から「学生の理解・納得を得るための大学の工夫例」や「好事例」として紹介されるなど、一定の成果は得られているように見受けられた。しかし、保育者養成機関における音楽

教育、とりわけ実技科目においては、遠隔授業に関する事例や知見の蓄積が未だ不十分なままである。

従来、養成校の音楽実技における授業は、保育者採用試験や保育のニーズに適したピアノ演奏や弾き歌いの技能を習得できるよう、学生を導くことにある。特に子どもの音楽表現の育ちを引き出す「歌唱」は、各園で広く実践されていることから、保育者は学生の時分から出来る限り多くの弾き歌いに慣れ、レパートリーの幅を広げることが望ましい。しかし実際の授業では、1名あたり僅かな指導時間しか取れないという事情や、近年はピアノ初学者の増加により個別の学習支援を求められる事から、教員の多くが「短時間での技能向上」を課題として、授業改善に努めてきた。

2000年代に入ってから、その改善策としてICTを活用する指導研究が報告されるようになって

\* Nobuko YAMAUCHI 聖和短期大学 専任講師

※ 本稿では文部科学省の示す「面接授業」を「対面授業」として記す

1) 文部科学省調査「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況」(令和2年7月1日時点)(最終閲覧2021年2月14日) [https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf)

2) 文部科学省調査「大学等における後期授業の実施方針の調査について(地域別状況)」(令和2年10月2日)(最終閲覧2021年2月14日) [https://www.mext.go.jp/content/20201002-mxt\\_kouhou01-000004520\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201002-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf)

た。それら先駆的取組には、教員による模範演奏動画の提示（小倉（2006）<sup>3)</sup> や、eラーニング教材の開発と学生の練習映像の動画提出等によるレッスンシステム構築の検証（深見他（2006-2007）<sup>4)</sup>（2009-2011）<sup>5)</sup>）等がある。しかし、実際にはこれら取組が一般に広く浸透したとは言い難く、その活用実績も限られているため、効果的なICTの活用方法については未だ模索が続いている。

そこで本稿では、ICTを活用した遠隔授業に対する学生と教員の評価を分析し、音楽教育における遠隔授業の可能性と課題を明らかにする。なお、遠隔授業の方法には、同時双方向型とオンデマンド型があるが、調査対象の科目では同時双方向型のオンライン授業を実践し、その手段としてWEB会議システムであるZoom（法人契約：Educationライセンス）を利用した。

## 2. 研究方法

### 2.1. 実践の概要

調査対象の科目は、S短期大学の「音楽I」である。当該科目は、1年生の前期に開講されており、通常の対面授業では次のように実施される。1グループ7-8名の学生が、グランドピアノの設置された専用教室に入室し、グループレッソンの形式で1名につき11~12分の指導を受ける。授業内容は、ピアノ演奏と弾き歌い（コード伴奏法）の実技である。

2020年度は、授業の本格始動が5月となった。始動までの準備期間に、担当教員間でのZoomシミュレーションや、学生とのZoom操作の確認、大学メールのアドレス交換等、コミュニケーション基盤を整えた。オンライン授業の運営手順を、[開始時に履修者点呼⇒個別指導の実施⇒終業時に再び履修者点呼]とし、担当教員と学生とで、予め次の2つの事柄を申し合わせた。

- ①個別にレッスン開始時間を定め、授業時間内に

学生は自主練習を行う。

- ②通信ネットワークの不具合等が生じた場合は、学生から担当教員にメール連絡した上で、代替措置として演奏動画を作成し、メール添付送信する。教員はその演奏に対してコメントを返信し、新たな課題を与える。

これらを周知し、文部科学省が告示した要件<sup>6)</sup>を満たすよう配慮した。

### 2.2. 調査方法

**調査手続き**：Google社の提供しているGoogle Formsを用いたWEB調査を実施し、WEB上で回答を得た。調査期間は2020年8月3日~12日であった。

**調査対象者**：「音楽I」の履修学生141名（女子のみ）および担当教員9名。有効回答数は学生137件（97.2%）、教員9件（100%）であった。

**調査内容**：「『音楽I』オンライン授業に関する調査」として、次の6項目について尋ね、5件法による選択肢回答（とてもそう思う~全くそう思わない）と、自由記述により回答を得た。1) 学生のピアノ学習歴 2) 教育効果 3) 授業運営 4) 総合的な満足度 5) メリット 6) 課題

なお倫理的配慮として、本調査は自由意志による回答であること、無記名で行うため個人が特定されることはなく不利益を被ることはない旨、依頼文に記載した。

**分析方法**：自由記述については、テキスト分析ソフト「KHCoder3」<sup>7)</sup>を用いてテキストマイニングを行った。

## 3. 結果

### 1) 学生のピアノ学習歴

**質問1**：「これまでのピアノ学習経験」の結果を図1に示す。未経験者も含め、ピアノ学習経験3年未満の初学者は全体の46%であり、半数近くが初学者

3) 小倉隆一郎（2006）音楽授業におけるMIDI演奏データの活用—ネットワークとフロッピーディスクを利用する—文教大学教育学部紀要40 pp. 43-53

4) 深見友紀子、他（2006-2007）「教員・保育者養成のためのピアノ実技eラーニングコースの設計と開発」（最終閲覧2021年2月14日）<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-18500742/>

5) 深見友紀子、他（2009-2011）「ICTを活用した教員・保育者養成機関におけるピアノ実技教育の質保証」（最終閲覧2021年2月14日）<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-21500964/>

6) 文部科学省「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ&A（令和2年5月22日時点）」（最終閲覧2021年2月14日）[https://www.mext.go.jp/content/20200525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200525-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf)

7) 樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析（第2版）—内容分析の継承と発展を目指して— ナカニシヤ出版

であった。一方、6年以上の経験者は全体の35.0%であった。

## 2) 教育効果

**質問2：「ピアノを弾く力は伸びたと思うか」**に対し、学生の最も多い回答は、「ややそう思う」66.4%、次いで「とてもそう思う」24.1%で、「全くそう思わない」は0件であった（図2）。つまり9割以上の者はピアノ演奏の技能向上を肯定的に自己評価していた。対して教員の最も多い回答は「ややそう思う」66.7%、次いで「ややそう思わない」33.3%であり、「とてもそう思う」は0件であった。つまり、約3割の教員はその効果について疑問視しており、その割合は学生より高い傾向にあった。

**質問3：「弾き歌いの力は伸びたか」**に対し、学生の最も多い回答は「ややそう思う」65.7%、次いで「とてもそう思う」27.0%で、「全くそう思わない」は0件であった。つまり9割以上の者は弾き歌いの技能向上を肯定的に自己評価していた。対して教員の最も多い回答は「ややそう思う」66.7%、次いで「ややそう思わない」11.1%、「全くそう思わない」11.1%、「どちらとも言えない」11.1%であり、「と

てもそう思う」が0件であった（図3）。つまり、約3割の教員はその効果を疑問視しており、その割合は学生より高い傾向にあった。

**質問4：教員対象の質問「より教育効果が高いと考えるのは、対面とオンライン、どちらの授業形態か」**に対する回答では、教員全員が「対面」100%を選択した。

## 3) 授業運営

**質問5：「担当者とのコミュニケーションは取れたか」**に対し、学生の最も多い回答は「とても取れた」55.5%、次いで「やや取れた」40.9%で、9割以上の学生が肯定的に評価していた（図4）。同様に教員も「やや取れた」55.6%、「とても取れた」22.2%、（図5）と、8割近くが肯定的に評価していた。つまり、コミュニケーションの取りやすさに関しては、両者の認識が一致しており、評価は総じて高い傾向にあった。

**質問6：「オンラインゆへのストレスは感じたか（指使いがわかりにくい、音のニュアンスが伝わりにくい等）」**に対し、学生の最も多い回答は「少し感じ

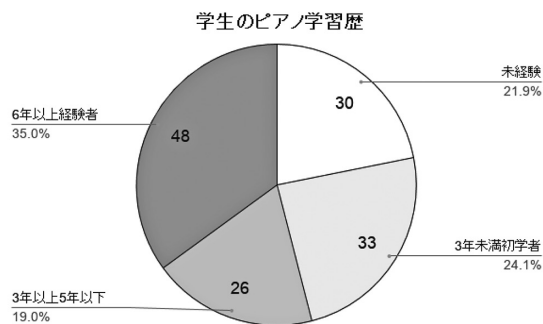


図1. 質問1の結果

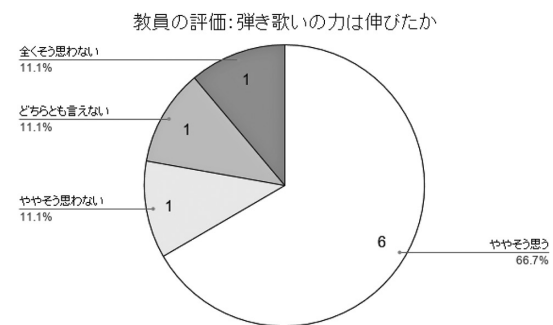


図3. 質問3の結果 (教員)

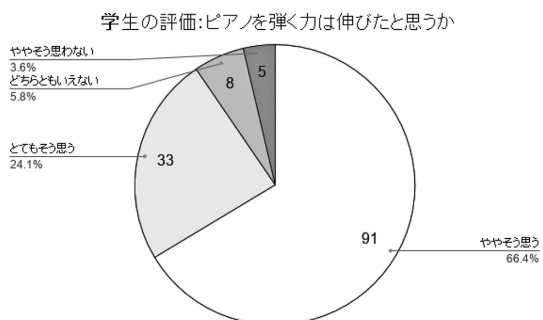


図2. 質問2の結果 (学生)

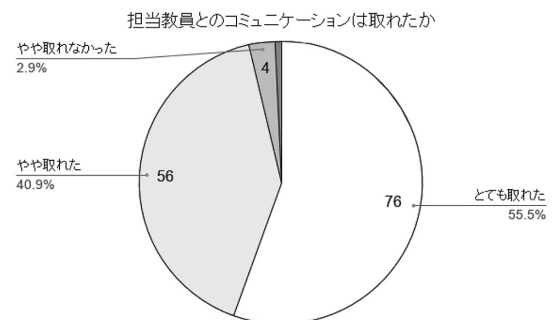


図4. 質問5の結果 (学生)

た」41.6%であった。次いで「あまり感じていない」40.9%、「全く感じていない」10.9%と続き、ストレスを認識していない者が、全体の半数強を占めた(図6)。対して教員の回答は、「とても感じた」66.7%、「少し感じた」33.3%(図7)であり、担当した教員全員がストレスを認識していた。つまり、学生に比べて教員が圧倒的に高い割合でストレスを認識していた。

**質問7：「通信回線等の不具合はあったか」**に対し、学生は「少しあった」54.7%が最も多く、「とてもあった」1.5%と併せて55%以上が不具合を認識していた(図8)。対して教員の回答は「少しあった」

77.8%、「とてもあった」11.1%(図9)と、9割近くが不具合を認識しており「全くなかった」は0件であった。つまり、両者ともに高い割合で通信回線の不具合を認識していた。

**4) 総合的な満足度**

**質問8：「オンライン授業に満足したか」**に対し、学生の最も多い回答は「ややそう思う」53.3%、次いで「とてもそう思う」37.2%で、その9割以上が肯定的に捉え満足していた(図10)。対して教員の回答は「あまりそう思わない」44.4%、「全くそう思わない」11.1%(図11)、「とてもそう思う」は0件と、その半数以上が否定的であった。教員に比べ

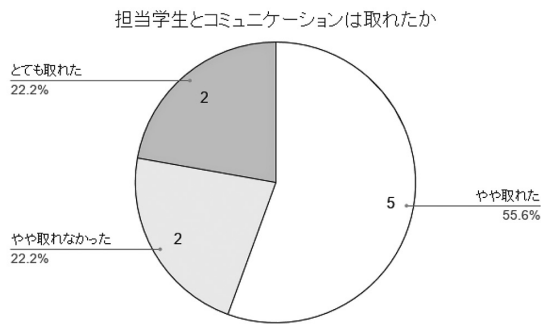


図5. 質問5の結果 (教員)

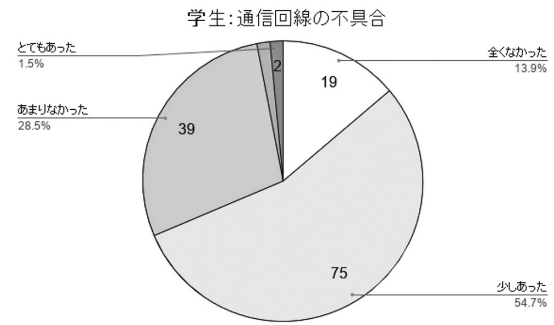


図8. 質問7の結果 (学生)

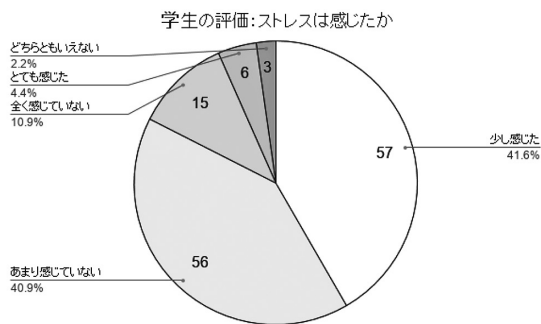


図6. 質問6の結果 (学生)

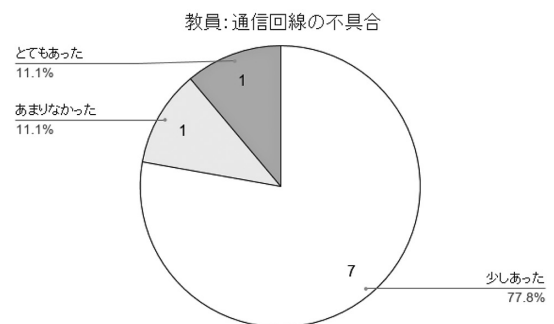


図9. 質問7の結果 (教員)

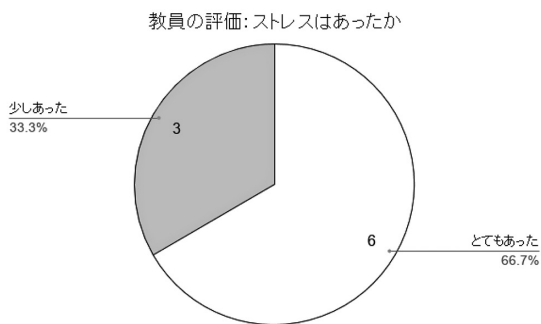


図7. 質問6の結果 (教員)

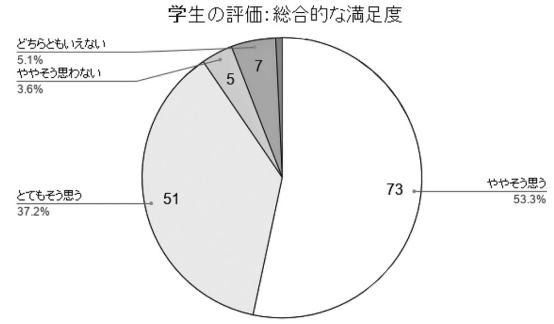


図10. 質問8の結果 (学生)

て学生が圧倒的に高い割合で満足していたことから、両者において満足度に対する認識ギャップが生じていたことが窺える。

**質問9：学生対象の質問「今後、受講したい授業形態」**に対する回答では、学生の70.8%が「対面」を、29.2%が「オンライン」を希望した（図12）。本調査では、質問4において、担当する全教員が「対面のほうが教育効果が高い」と回答したが、学生の約3割は対面よりオンラインの授業形態を希望したことが認められる。

なぜ学生は教員よりもオンライン授業を高く評価

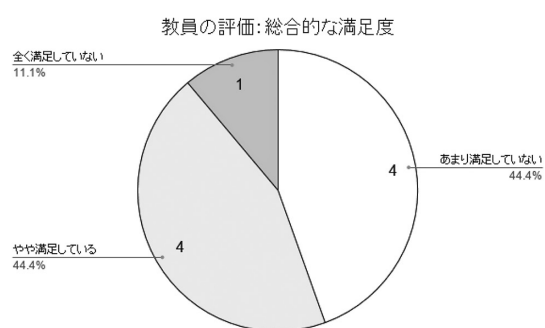


図11. 質問8の結果（教員）

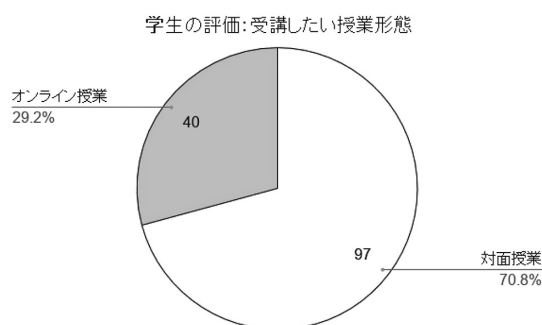


図12. 質問9の結果（学生）

し受け入れたのか、その要因を次の自由記述で得た回答から探る。

### 5) メリット

**質問10：「オンラインで良かったと思うこと」**に対し、学生より108件の自由記述回答を得た。先述の「KHCoder3」を用いて「頻出語」および「共起ネットワーク」の出力を行った。テキストのクレンジングを行った結果、文章数は120、総抽出語は2071であった。出現回数が8以上、上位18語の「抽出語リスト」を表1に示す。頻度が高く出現した順に、「練習（42）」、「自分（31）」、「時間（28）」、「ピアノ（18）」、「授業（18）」と続いた。

頻出語の関連性を示した共起ネットワークを図13に示す。描画する共起関係を上位30に設定した結果、大きく次の4つのテーマに分類できた。

- ①練習時間の確保について
- ②演奏における緊張について
- ③自宅でのリラックス効果について
- ④指導内容について

各テーマにおいて記述された内容の詳細を以下に記す。

#### ①練習時間の確保について

最も多く頻出された語「練習」「時間」「自分」「ペース」「取り組む」の結びつきから、「練習」に着目し、実際の記述の中でがどのように用いられているか確認したところ、次に示す記述が見られた。（下線は筆者が加筆）

- ・自分のペースで練習に取り組むことができる
- ・授業前後の練習時間の確保
- ・自分の時間以外は練習が出来るため
- ・自分の番まで練習して、終わったらすぐに言わ

表1. 頻出語リスト：「オンラインで良かったと思う事」（学生）

順位	頻出語	品詞／活用	頻度	順位	頻出語	品詞／活用	頻度
1	練習	サ変名詞	42	10	レッスン	名詞	10
2	自分	名詞	31	11	ペース	名詞	9
3	時間	副詞可能	28	—	出来る	動詞	9
4	ピアノ	名詞	18	—	他	名詞C	9
—	授業	サ変名詞	18	—	対面	サ変名詞	9
6	弾く	動詞	16	—	良い	形容詞	9
7	先生	名詞	15	16	緊張	サ変名詞	8
8	受ける	動詞	14	—	人	名詞C	8
9	教える	動詞	13	—	弾ける	動詞	8

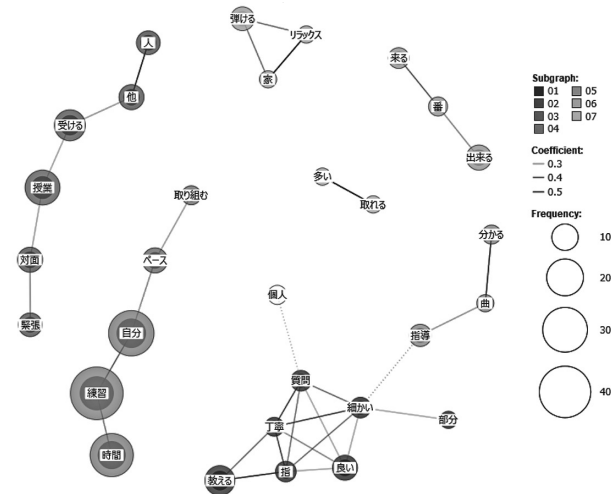


図13. 共起ネットワーク：「オンラインで良かったと思う事」（学生）

れたことを実践出来ること

これらから「練習時間の確保」や「授業内での予復習」を自分のペースで行えることに、メリットを感じている者が多いと読み取れる。

②演奏における緊張について

次に多く頻出された語「授業」「受ける」「対面」「緊張」「他」「人」の結びつきから「緊張」に着目し、実際の記述の中でがどのように用いられているか確認したところ、次に示す記述が見られた。（下線は筆者が加筆）

- ・対面より緊張しない
- ・1対1のレッスンが受けられるので緊張せずに弾けた
- ・他の人のレベルを気にせず自分のペースで練習することができたので、周りと比べて落ち込むことがなく、緊張もしなかった

これらから、対面授業ではグループ内で他者に自分の演奏を聴かれることや、習得レベルの比較により緊張が生じやすいと捉えた者が多いと読み取れる。また、関連する記述として「周りを気にせず集中して取り組めた」も散見され、個別指導によってプライベート空間が確保され、「自分のペースを保てる」ことをメリットとして捉える傾向にあると推察する。

③自宅でのリラックス効果について

「家」「リラックス」「弾ける」語の結びつきから、「リラックス」に着目した記述を確認したところ、次に示す記述が見られた。（下線は筆者が加筆）

- ・自分の家ということもあり、リラックスして弾けることができた
- ・自宅でリラックスして受講できたと感じました

自宅という安心空間での受講は、対面に比べて落ち着いて演奏できる効果があると捉えた事が読み取れる。これは②とも関連しており、メンタル面において「自分のペースを保てる」ことをメリットとして捉える傾向にあることが読み取れる。

④指導内容について

「指」「丁寧」「質問」「細かい」「指導」「教える」等の語の結びつきから、「教える」語に着目したところ、次の記述が見られた。（下線は筆者が加筆）

- ・指使いなど細かい所も丁寧に教えてくださったので勉強になりました
- ・オンラインだからではなく、先生が一人一人丁寧に教えてくださったおかげで、受講してよかったなと感じました
- ・分からないところをすぐに聞いて、詳しく教えて下さり分かりやすかったです

オンラインであっても、教員らが丁寧に学生に接し、細やかな指導に努めていたことが、こうした記述に繋がったのではないかと推察する。また、関連する記述として「1対1だから分からないことをすぐ聞いた」「わからないことがあってもすぐ質問できた」が散見され、その場で直ぐに疑問が解消できる事をメリットと捉える傾向も読み取れる。また、質問の方法としてオンライン上での会話の他にメールやZoom内チャットの活用など、コミュニケー

ション手段が複数あったことも影響していると考えられる。

その他、「感染リスクの回避」や「通学時間が不要」等、散見された記述を以下に記す。(下線は筆者が加筆)

- ・通学のときの感染を気にしなくて済んだ
- ・自身がコロナに感染している心配がなかった点です。特に、祖母と同居しているので、そう思いました
- ・学校への通学時間分を練習に充てることができた

次に、教員から得た回答9件を記す。(下線は筆者が加筆)

- ・感染リスクの回避
- ・天候（警報発令）に左右されない
- ・学生の出席率が高くなる
- ・通勤が不要
- ・「弾き歌い」ができる
- ・個別指導で2人きりになるので、学生が個人的な状況等を話してくれた  
教員が学生に配慮すべき事のヒントになった
- ・他の学生が聴いていないので、あまり緊張しなかったようだ
- ・学生が他の学生を気にせず教員とコミュニケーションを取れたこと（個別指導やメール等を通して）
- ・コロナ禍でも安心安全に授業ができた。学生も自宅のリラックス空間で落ち着いて授業を受講していたようだ

「感染リスクの回避」「通勤が不要」「コミュニケーションが取りやすい」「学生が緊張しなかった」等の記述が見られるが、これら4事項は学生の認識とも一致している。特にコミュニケーションについては、質問5の結果とも一致していることから、主要なメリットと推察する。また「『弾き歌い』ができる」記述からは、授業内容の観点からも「感染リスクの回避」の重要性が読み取れる。

## 6) 課題

質問11：「困った事柄、改善してほしい事柄」について尋ねたところ、学生より98件の回答を得た。テキストのクレンジングを行った結果、文章数は109、総抽出語は1768であった。出現回数が7以上、上位20語の「抽出語リスト」を表2に示す。頻度が高く出現した順に、「音(33)」、「通信(29)」、「回線(28)」、「悪い(22)」と続いた。また語と語の関連性を示した共起ネットワークを図14に示す。描画する共起関係を上位30に設定した結果、大きく次の4つのテーマに分類できた。

- ①通信環境について
- ②デバイスの操作の工夫について
- ③同居する家族への負担について
- ④他者との比較について

各テーマにおいて記述された内容の詳細を以下に記す。

### ①通信環境について

最も多く頻出された語「音」「通信」「回線」「悪い」の結びつきから、「通信」と「回線」の語に着目し、実際の記述の中でがどのように用いられているか確認したところ、次に示す記述が見られた。(下線は筆者が加筆)

表2. 頻出語リスト：「改善してほしい事」(学生)

順位	頻出語	品詞/活用	頻度	順位	頻出語	品詞/活用	頻度
1	音	名詞 C	33	—	自分	名詞	11
2	通信	サ変名詞	29	12	弾く	動詞	10
3	回線	名詞	28	13	レッスン	名詞	9
4	悪い	形容詞	22	—	指	名詞 C	9
5	聞こえる	動詞	16	15	ピアノ	名詞	8
6	先生	名詞	15	—	授業	サ変名詞	8
7	時間	副詞可能	14	—	電波	名詞	8
8	見る	動詞	12	—	特に	副詞	8
9	困る	動詞	11	19	画面	名詞	7
—	自分	名詞	11	—	難しい	形容詞	7

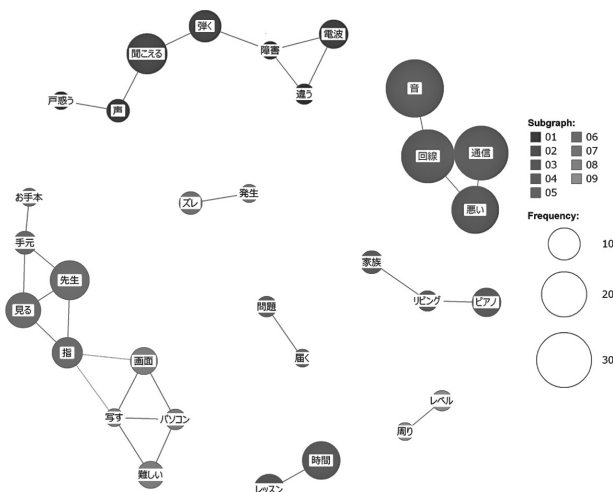


図14. 共起ネットワーク：「改善してほしい事」（学生）

- ・通信回線が悪く、音が聞き取りにくかったり、指使いがあまり分からないこと
- ・通信回線が悪い時があり、時差が起きたり zoom から退出してしまったりと十分なレッスンは受けられませんでした
- ・通信回線により、音ズレが発生した点

また、同様に「聞こえる」「弾く」「電波」「障害」等の結びつきから、「聞こえる」に着目すると、以下の記述が見られた。（下線は筆者が加筆）

- ・電波が少し悪いと音質も悪くなるので聞き取りづらい時があった
- ・電波障害により、自分は弾いていても聞こえてなかったり、違うように聞こえたりしてしまうことがあった
- ・音が聞こえにくかったり、音と映像が合っていないことがありました

これら通信環境の不具合や電波障害に関する記述が圧倒的に多かったことから、遠隔授業に必要な通信インフラの整備は未だ不十分であることが窺える。居宅での受講準備が整っていない学生に対しては、大学の支援策としてモバイルルーターやノートPCの無償貸与が行われたが、遠隔授業においては居住地による通信速度や容量の格差が教育格差に繋がる可能性もあるため、支援の必要な者への体制整備が望まれる。特に、耳からの情報を軸に据える音楽教育では、ネット回線の特性として頻発する「音ズレ」「音と映像が合わない」や、不具合による「音が聞こえない」は、致命的な課題と考える。

② デバイスの操作の工夫について

次に多く頻出された語「先生」「見る」「指」「手元」「お手本」の結びつきと、「画面」「パソコン」「うす」「難しい」の結びつきから「先生」に着目したところ、次の記述が見られた。（下線は筆者が加筆）

- ・自分の指をパソコンで写しながら先生の画面を見るのが難しかった
- ・口で説明されても分からない部分があったので、鍵盤と先生の手元が見たい
- ・先生のお手本を見せていただく時、手元が見たい。指の形などの確認したい

これら記述により、教員側に学生の理解や納得が得られるような配慮や工夫が必要であることが読み取れる。

③ 同居する家族への負担について

続いて「ピアノ」「家族」「リビング」の結びつきから「家族」に着目したところ次の記述が見られた。（下線は筆者が加筆）

- ・音楽は特にマイクをオンにしないといけないので、家族に静かにしてもらわないといけないこと
- ・ピアノがリビングにあるため、時間帯によっては家族に迷惑をかけてしまうこと
- ・レッスン中、家族の生活音が気になってしまうこと

これら記述により、音楽実技の授業では、家庭でのピアノの設置場所が受講場所に固定されるため、同居する家族への負担が生じやすい事が示唆され



た。

#### ④他者との比較について

「周り」「レベル」の結びつきから「周り」に着目し、文章を確認したところ、次に示す記述が見られた。(下線は筆者が加筆)

- ・周りのレベルがわからないので自分だけかなり遅れているのではと不安になることもあった
- ・周りの進み具合やレベルがわからないので自分ほどのぐらいつれば良いのか分からないこと

これら記述より、先述のメンタル面で「自分のペースが保てる」ことをメリットと捉えた学生とは対照的に、その状況をむしろ不安に感じる者も少なからずいたことが読み取れる。

その他の意見として、次の記述が散見された。

- ・家にしっかりとしたピアノがなくてペダルや強弱の付け方を習得できなかった
- ・他の人と交流をすることができない

ピアノ初学者が一定数いることから、ペダル機能の備わっていないキーボードで受講する者もいた。そのため指導内容が限定されるケースが生じたことも読み取れる。

次に、教員から得た9件の記述を記す。(下線は筆者が加筆)

- ・学生の所有楽器の格差(特にペダル機能の有無)がある
- ・学生が楽器を所有していない場合の楽器貸し出し制度等の整備をお願いしたい
- ・学生の手元が見えるよう、カメラ位置の指示が必要
- ・通信環境が悪い場合がある
- ・音質が悪いため、音色や音量の変化、ペダルの響きが十分に聴き取れない
- ・音が途切れる
- ・音ズレが生じるので、拍子やリズムを学生に体感させづらい
- ・実際に生音を聴いてみないと本当の実力がわからない
- ・(回線が繋がらない場合に学生が提出した)動画チェックに時間がかかる

「通信環境が悪い」「カメラ位置の指示」等の記述より、教員は「通信環境の強化」「デバイスの操作

の工夫」を課題と認識していたことが読み取れる。これらは先の学生の認識とも一致しており、同様の質問7に対する回答結果とも重なっていることから、ICT環境の整備および支援、ITリテラシーの向上は、オンライン授業における重要な課題の一つであると考えられる。

また、教員の記述に「音」に関する語「途切れる」「ズレる」「音色」「音量」「ペダルの響き」等が多く頻出していたことから、「音質」を注視していたことが窺え、通信回線の良し悪しに音質が左右されるオンラインの限界を感じていたことが読み取れる。その結果、「教育効果は対面のほうが高い」との認識に繋がったのではないかと推察する。

#### 4. 考察

学生と教員が一致してメリットと認識している事柄は、次の3つであった。①コミュニケーションが取りやすい ②感染リスクの回避 ③移動(通学・通勤)が不要、である。①コミュニケーションの取りやすさでは、個別指導により学生が他の者を気にすることなく教員に質問できる環境にあったことや、大学メールおよびZoomのチャット機能の活用等、複数の方法により、双方向のやりとりが可能であったことが影響していると推察する。②感染リスクの回避では、3密回避はもとより、授業内容の要でもある弾き歌いについて、飛沫感染を気にすることなく実践できた点での成果は大きいと考える。③移動の不要については、時間の有効活用と感染リスクの回避を同時に実現できるメリットにおいて、その価値は高いと認められる。

また、総じて学生は教員よりもオンライン授業を高く評価し、受け入れていた。その要因として、次の3つの事柄が挙げられる。①練習時間を確保しやすい ②自分のペースで学べる ③緊張せずに落ち着いて受講できる、である。①については、教員間で学期末に行った担当者会議においても、学生は非常によく練習していたとの認識を共有した。また、①②③によって出席率が上がったとも考えられるため、成果の一つと言えるだろう。

しかし一方で、課題も明らかとなった。その一つはオンラインにおける教育の質保証である。今回の調査結果では、総じて教員の評価が低かった。「教育効果は対面のほうが高い」「拍子やリズムを体感させづらい」「ペダルの響きが聴き取れない」「生音を

聴いてみないと本当の実力がわからない」等から、教員が授業内容の質を疑問視していたことは明らかである。中でも特に、デジタル音およびペダル機能の不備による「内容の乏しさ」が課題として認識されていた。

元来、音への感性は各人の五感によって養われる。空間に広がる生音の響きを耳で聴き、体感することによって良い音を聴き分ける良い耳が育つと考えられるが、画面越しのデジタル音から、こうした音の響きや広がりとはもとより、音の強弱や拍感、ニュアンスなど細かな表現の違いを聴き取ることは難しい。加えて、歌唱指導の際は口の開け方や顔の表情に対する指導も必要となるが、手元と顔の両方を映し出すカメラ角度の調整は困難である。そのため指導が基礎的な演奏ミスの指摘に留まりがちで、踏み込んだ指導には至りにくかったのではないかと推察する。

また、学生の所有楽器によってはペダルや十分な鍵盤数が備わっておらず、内容を制限せざるを得ないケースも生じた。対面授業ではグランドピアノでレッスンを行っていたため、通常の授業で出来たことを同じように望むと上手くいかず、その結果、多くの教員の「ストレスをとっても感じた」「総じて不満足」との認識に繋がったのではないかと考える。

更には、オンラインにおける他者観察の不足も教員の評価に影響した可能性がある。これまでの対面授業では、他者観察も教育の重要な要素との考えに基づき、グループレッスンの形式を採用していた。そのため、教員の多くは学生同士による他者観察を通じた間接的な教育効果を実感していたのではないかと考える。従って、今回、学生がメリットと捉えていた「自分のペースで学べる」「緊張せずに落ち着いて受講できる」環境が、必ずしも教員の考える教育効果には結び付きにくく、その認識のギャップが調査結果にも反映されたのではないかと推察する。

他方、両者が一致して課題と認識した事柄は「通信環境の強化」「デバイスの操作の工夫」であった。これら ICT 環境の整備については、遠隔授業における最大の課題と言えるだろう。また、「デバイスの操作の工夫」には、個人の IT リテラシーの向上が欠かせないため、ICT を上手く活用するための研修や情報交換の場の拡充が望まれる。

## 5. 今後の展望

学びのセーフティネットとして、急遽取り組んだオンライン授業であったが、本調査から、学生に広く受け入れられていた事が明らかとなった。特に、学生がメリットと捉えた「教員とコミュニケーションが取りやすい」「練習ができる」「自分のペースが保てる」は、どの授業形態にあっても、好意的に受け入れられる事柄であろう。

ポストコロナ、更にはその先の未来社会においては、大学教育のデジタル化や DX 促進の重要性が増していくと予想する。従って、これまで余り遠隔で実施されてこなかった実技科目においても、ICT の活用が徐々に定着していくのではないかと考える。また、学生が早い段階から ICT を活用する術を身につければ、保育現場で保育者として情報を発信する立場になった時に、保育でどのように ICT を活かせるのか、その活用方法を考える力が備わるのである。

一方で、今回の Zoom を利用した同時双方型のオンライン授業においては、多くの教員がその教育の質保証を疑問視していた。特に、音楽実技では先述したように「音質の課題」が生じやすいため、教員間で「オンラインで出来ること、出来ないこと」の情報をデータとして蓄積し、認識を共有した上で、指導の改善に努めていく必要があると考える。今後は、こうした教育の質保証の観点から、遠隔での授業改善方法を探っていきたい。

### 〈謝辞〉

本研究のアンケート調査にご協力くださいました「音楽 I」の履修学生と担当教員の皆さまに、心より感謝申し上げます。

### 〈付記〉

本稿は令和 2 年度全国大学音楽教育学会関西地区学会後期研究会での、口頭研究発表「with コロナ時代の音楽教育—オンライン授業に対する学生と教員の評価から見える可能性と課題」の内容に加筆・修正を行ったものである。

### 参考文献

- 二瓶裕之、門貴司、西牧可織 (2020) 北海道医療大学のライブ配信による遠隔授業の取組みと課題 JUCE Journal 2020-1 pp. 11-16  
 山本敏幸、岩崎千晶、柴田一 (2020) 関西大学のオンラインを活用した授業の取組みと課題 JUCE Journal 2020-1 pp. 2-10

- 内藤徹（2020）同志社大学商学部生の遠隔授業環境に関するアンケート調査結果報告書 同志社商学72-2 pp. 277-288
- 大和田和治（2016）東京音楽大学におけるオンライン英会話プログラムの導入とその教育的効果の検証 東京音楽大学39 pp. 53-66
- 鈴木範之、阪まどか、藤岡由記（2021）遠隔によるピアノ弾き歌い指導の実践的考察 —KHCoder を用いた計量テキスト分析を通して— 日本保育者養成教育学会第5回研究大会抄録集 p. 60